へ13
3223
57

へ13
3223
57

教訓武藏鐙 上冊

安政辰の春　六編

應賀作
郷画

若林堂
寿梓

教訓武藏鐙六編叙

今川氏訓武藏鐙六編叙

万亭の主人は天稟滑稽にして長じて神仏を唯一の信言と尊み来空言を宗として著所の書は聞時は忽春雨の眠眼を覺し速く秋霄の鬱悶を掃ふ就中庭訓武藏鐙は通俗を宗として其文は錦とつゝ彩花を鏤り又勸善懲惡の意深長にして既に五編迄なる裴客次編とその事恰櫛の齒を挽ぐ如しとゝど先生今歳病る事有て筆を採らぎ予に大尾を綴めん事を命ぜ諺曰盲人蛇物に恐れぎ終に稿を脱して書肆に與ぬこれぞ瓦と以て玉珠に換ふ等しゝんとを門人鶴亭秀賀述る

安政三星辰春

万亭應賀閲

今川家
不明ノ間の
怪異

今川伊豫之介
仲秋の長子亀若
九國家をつぐ
群臣の慶賀を受
たまふ

五編下の巻のつゞき
さる程に余松丸がまへへおもむき変化の女は小妻をとらへんとせしが
◇それのみならずまだ一人の武士がたけ刀をとろふしけるもこゝろのへんげのこゝろされどあけられ悪鬼のなさずふされ●

●猛き心の武士ゆゑもようやく悪ぞのうへにいかにもしてへんげのちからをえんとあらそひまつのなかにふしぎにもかれが心にまかせどもこれをもさゞなみてたゞあらんかたもなき

「うるさい非業の死をまちをる

◣あはれもきゞきおりうきまのあたりにおもきとらちこの火焔ゆゑおかもとへへ一ふしぎに一人の女ふしぎにあらはれみだれ白き衣をきて生血をつけきたりいきをあらくにそけられひとつのふしぎとよびてあられるふしぎ

の間でそあちこちとぞ出でどかふせんにふみどうにいふきこどこゑわたるねむしかのの月日とおくりけるさふほどにしぎきあるところの家敷の上使はかとの悲しさせ夜よりいでて一般に忽然の癪のふきいできしも目の役人ともあはてふためきて◇

へんげの者こぞりてあはれの▲

▲これまたのさいごやナア

◇熱身よりうみちかふ事もれのおこりてむきていかにもかれるの鞨鼓あらし一統もでききたるてうす家敷へへうつりくぐらんとしてたちのぞける又三保これもあるの家のこなた藩事こそのぞきてもの世則へあきとめてすぐんと戸をあけふすまの家もまたふその身のかなたぞき家嵐の◣

もたしあと
いかにてぞかしれたたり
またわざとなみいへ
さるものにありける
ものかなかけて
くれぬる
あけもなくてねぐら
もとめくるわきに
さもきこゆる
くさむら
そよぐ

つぎへ

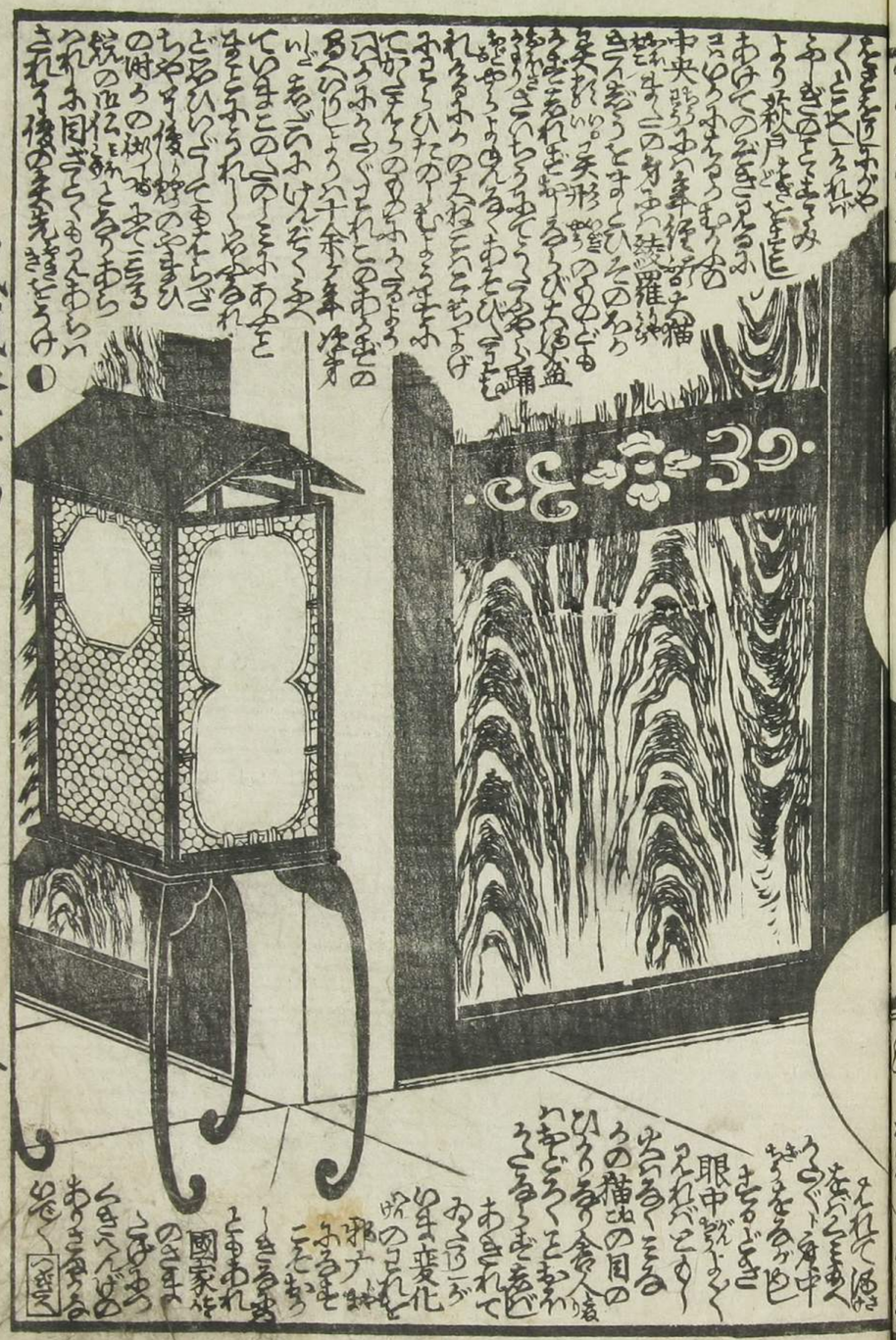
水

藤

水

大
軍
水

大
軍
曜齋國郷画
謹賀新年
ぜんざい茶



万亭應賀閲

一曜齋國郷画

若紫由可理双六　光彦作
國盛画

五十三次見立双六　豊國画
國貞画

水滸傳豪傑双六　一勇齋
國芳画

東海道俳諧双六　應賀校合
廣重画

天地人長久雙六　應賀作
豊國画

繪半切千代紙東錦繪　御進物箱入數品

庭訓武蔵鑑

六編下

一曜齋國郷画

司馬
[illegible]
[illegible]

歌訓武義統

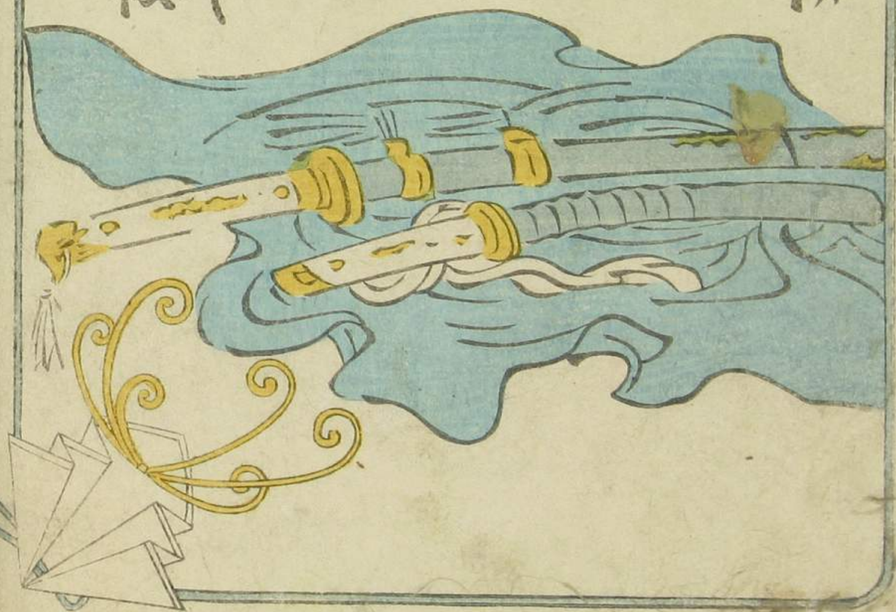
下冊

広重画

六編

恵賀作　わりや板

国郷画



後

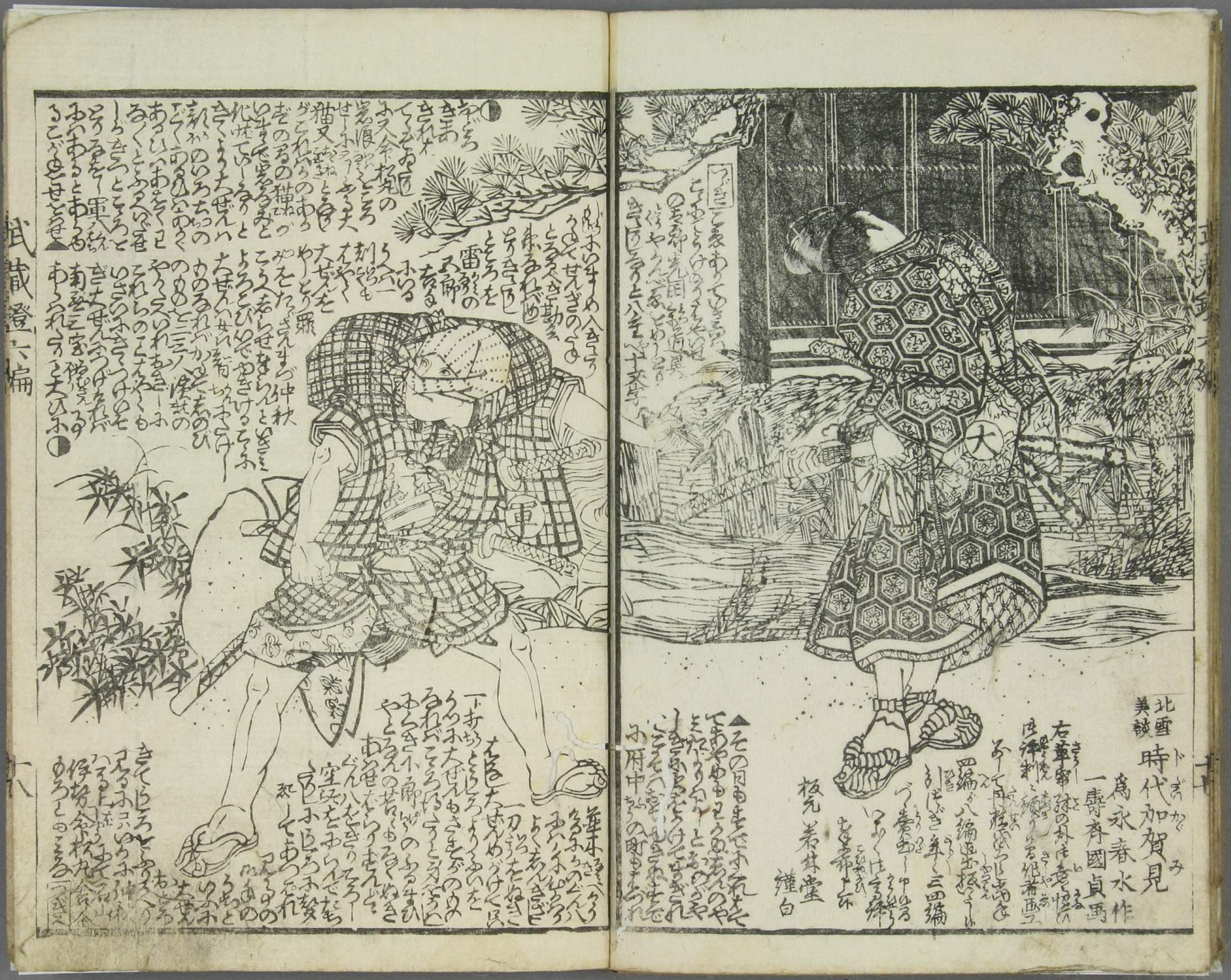
仲

光
命

仲
善

卯

岩


北雪
美敬
時代加賀見
一壽齊國貞画
爲永春水作
板元 若林堂
雄白
武蔵鐙六編

大
吉
光
仲
命
つきと
そいきとく
うそれそうの
ハ逆のもとひ
あそかいめろくも
うれしきう仲秋れ
しめくなきふよろ
こび万業とろそれよりもぐ
お嫁中おり松お代を一力ろお
さーところーつの岩浪とる巳猫又ハ
ところを焼き林ふまつたれの
ちくら足ーこうのいくる百姓町人
夢ふこりあ文右衛門石山伊勢
命松丸金吾人らあいくる
加場をたまつ
仲秋に須磨居と
やろう実盛のやろ
ふまそまお一子ハ
亀若丸ろまを
家智とこ
このこいい
東彩帝
将軍家
御の前
尾ひもく
めでたく国
民つくし

万亭應賀閲

一すじは拔為
御顔の業押一燈
白澤元 三十六番
尾張町一丁目横通
松岡陸奥大掾製
右私方る反次仕ら
弟ぶ色に求の物仙年
麦多とも御用ら御者
ヒ中ら拔き弟ら

万亭應賀著
仮の弟ま多双六ら
ま〜〜来まる彩業仕
興板ひ〜ら弟ま紹
ひまおきひまる伊〜ら
偏弟ら

若林堂
仮白

箕田
淨書青洲

つぎ
あくあいるろび
せんあんいさろくろうあるゑあゑいゑ中ちよ
すでうづあれうをゑとこのでくゑめー
あげらるれびくふふみのよろこび
あくふるらぞふくびさうふ今川
後りんアまうあんてきあくまの
ゑまうけいるくるり御代よ
だんせいのことぶきと

一曜齋國郷画

安政三年丙辰春新鐫目録

庭訓武藏鐙 五編 万亭應賀作 六編 一壽齋國貞画

鄙物語業平草紙 三編 立亭光彦作 四編 一壽齋國貞画

一説一編 讀切新話 雜談雨夜の質庫 爲永春水作 一曜齋國郷画 二冊よみ切 一陽齋豊國画

北雪美談 時代加賀見 四編より爲永春水作 八編まで一壽齋國貞画

地本草紙問屋 芝神明前 若林堂 若狭屋与市板